

シリーズ[§]『青松』を読む[§]①

手づくりで録す¹⁾

——国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて——

阿 部 安 成

series[§]『青松』を読む[§]①手づくりで始まる、wps243、2015.12

series[§]『青松』を読む[§]②手づくりで詠む、wps244、2016.01

series[§]『青松』を読む[§]③手づくりで偲ぶ、wps250、2016.04

series[§]『青松』を読む[§]④手づくりで悼む、wps251、2016.04

series[§]『青松』を読む[§]⑤手づくりを保つ、wps255、2016.05

series[§]『青松』を読む[§]⑥手づくりで伝える、wps256、2016.07

series[§]『青松』を読む[§]⑦手づくりと、^{たたか}戦ひと、拳島へ、『滋賀大学経済学部研究年報』vol.23、2016.11 予定

series[§]『青松』を読む[§]⑧手づくりが震え^{おのの}戦く、wps257、2016.09

series[§]『青松』を読む[§]⑨手づくりで引き続き、また、新たに、wps258、2016.09

series[§]『青松』を読む[§]⑩手づくりの記録、『彦根論叢』No.410、2016.12 予定

2015/4/5 瀬戸内海に霧

座談会記録 手書き手づくり『青松』第13号は、1945年10月10日の発行（同誌第13号については、上掲『青松』を読む^⑩「手づくりの記録」を参照）。表表紙見返しの目次には、「土谷」の名で「座談会記事」が掲載稿のひとつとしてあがっている。その記事に使われた原稿用紙は、謄写版で刷ったような半ペラのそれ。ページノンブル1がついた用紙が稿の扉となる、半ペラ32枚の大長編である（ただしページノンブル4と5がとんでいる）——「座談会／◎蒙古の話／◎進駐軍の話／四国総監府の尾崎衛生技師を迎へ／園長殿始

1) 本稿は2016年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究C「20世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究」（JSPS 科研費 26370788、研究代表者石居人也）、2016年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究「療養所環境を交^まぜる」の成果の1つである。

め／職員、病友一同／司会は林先生／文責土谷勉／九月卅日、於会館」(ページノンブル1)。

この扉の裏には、青インクで文字が記されている——「食事分量調査係り／作業大監督、編輯係り／事業部配給部の係員／炊事監督／買店係員、養鶏係員／買店監督／ラヂオ係りの作業を新めること／〔1行判読不能〕／養鶏養豚の特別手当へんこう」。

つづけて本文を記そう。

林、総監府の尾崎先生をお迎えし、いろいろとお話を伺ったところ、とても有益な話なのでなかの方々にもお聞かせしたいと思ひました。先生は五年間も蒙古にをられ、この二月に帰ったばかりです。そして幸ひ東京、横浜、京都などで進駐軍に接してをられますので、その模様も承つたらと思ひます。／話のきっかけにでもと思ひ、昨日百科事典をひらひて見ると、蒙古の面積は日本の五倍もあります。その蒙古の概念とでも言つたふうなものから承つたらと思ひます。

蒙古の概念

尾崎、先刻まで魚釣りをしてゐたので何の準備もないのですが——。／だいたい蒙古は今の太原の南の方に興り、満洲にツングース族があり、西の方にトルコ族があり、中にはさまれて弱い国でしたが成吉思汗が勢力を得て中央アジアから歐洲にまで彼の有名な大遠征をした訳です。／蒙古を大別すると内蒙古と外蒙古に分れます。蒙古人の侵入を防ぐために築いたのが万里の長城です。支那人は一例を引きますと「我愛爾」〔原文では「爾」に人偏がつく〕といふ様に書くのが普通ですが蒙古人は「我爾愛」と、言語学的にも日本人とよく似てゐるのです。／外蒙はつまり蒙古自治国と言ひましてソ聯の指導下にあります。そして西にカイラートがあり、ブリアート共和国がある。支那事変が始まつてからは日本軍がドンドン進駐したので支那人の圧迫に耐へ兼ねてゐた蒙古人は軍の援助によつて所謂蒙疆を作つた。私はつまりその蒙疆にゐた訳です。日本はその時、長城以北を全部インチキして独立さした。蒙疆は日本と略々同じ広さです。人口は五百万、そのうちで支那人が二百万。独立国にするにはどうしても最少限度五百万位必要です。東京から飛行機で発つと、張家口まで三日かゝります。張家口に私はちようど四ケ

年をりました。／だいたいこんなものですか――。

林、日本と非常にちがってゐるといふ点。気候なんか勿論ですけど

尾崎、彼らが羊や牛を追って遊牧の民といふことです。旅行記など読むと、羊肉を食って牛乳をのんで生活してゐるといふ様子に書いてありますが、実はそれほどでもないのです。だいたい農耕が出来ぬので牛や羊を飼って生活してゐる訳です。遊牧と言つて彼らは青草のある土地を追って移動する。包（支那語）と言つてお椀を逆にした様な家を持つてゐるんです。そしてそれがどう言ひますか、折りだゝみ式になつてゐて、ひろげると一間位の広さになるそれを四ツも五ツも広げてならべて壁代りの囲にし、その上に日本の傘のやうな恰好の屋根をかぶせる。〔このあたりの記述の欄外に「包」とおもわれる挿画と「竹矢来」の文字とその画〕そして風が吹いても飛ばぬ様繩をかけると、もう立派な彼らの家が出来る。六畳位敷けるんです。建てるにも崩すにも男二人でざつと二時間位――。

林、雨はもらぬのか

尾崎、あちらは雨がとても少い。南の方で三百ミリ、北方は二百ミリ、雨の日と言つたら一ヶ年に数日しかないんです。蒙古といふ土地は雨の降らぬ処なので傘など絶対に要りません。たとへば旅行しても傘を持たぬ。私などもその癖がついてるものですから今度なんかも京都の辺の何処かに置忘れてしまつた

林、蒙古風といふすごいのが吹くらしいですが飛ばぬか

尾崎、飛びませんね。

林、座はどんなにしてゐる

尾崎、彼らは土地を絶対と言つてよい程掘らぬのです。実は喇嘛教のきびしい教へで蚯蚓を殺す、つまり殺生禁断なんですね。農耕しないことなども関係があるのですが、たとへば井戸を一つ掘るにしても彼らは決して掘らない。支那人を雇つて来て掘るといふ位なんです。普通、家の真中に囲炉裏を作り、そのぐるりに蒙古の絨氈を敷く。それから／日本だと人が死ぬと普通土の中に埋めるが彼らは「風葬」にする。／みなさんも知

つての通り、風葬、土葬、火葬、水葬といろいろありまして、黄河の流域などでは水葬にしますが、たいていは先の風葬にするんです。子供が死んだりなどすると「親に先立つ不孝な奴」など言つて屍を馬の上に乗せて走り、落ちた処に棄てゝ帰るといふ様な訳です。しかし棄てる場所は家によつて大抵きまつてゐるやうです。あちらには狼が沢山をるものですから、その狼が屍体を食ふとか、鳥がとるとかすると「成仏」したと言つて喜びます。屍体がそのまゝあると、僧侶を呼んで来て冥福を祈る祈禱をします。〔このあたりの記述の欄外に「ラマ塔」の文字とその画〕／人類学上蒙古人の頭蓋骨はとても貴重なのです。日本なんかにも完全な頭蓋骨は一つ二つしかないのぢやないかと思ふ。私も一ヶ持つてゐたのですが――。見つけれるとひどい目に遭ふから盗んで来るので。／服は支那服を着てゐるが、とてもその服の裾がひろく出来てゐて、背丈より高い位です。馬に乗るからでして、彼らは何処に行くにも馬に乗る。十才位でもう裸馬に乗り、口で手綱をとつて競走などするのですが絶対におちない。〔このあたりの記述の欄外に、「タヅナー一本デ子供モ裸馬ヲ走ラセル」の文字とその画〕日本の競馬だと円周をグルグル廻るんですが、あちらは土地が広いので決勝点まで一走りなんです。

食生活

尾崎、彼らは原色の着物です。刺戟を求めるのかも知れませんが、草原地などでは好んで赤茶色の衣物をきる。／蒙古人にとって一番の御馳走は羊の丸煮です。彼らは一様に腰に蒙古刀と、噛み煙草を入れた袋と、火打石とお椀をつりさげてゐる。その腰の蒙古刀で丸煮の羊を切つて食ふ。〔このあたりの欄外に腰に蒙古刀をさす人物の挿画と、「火は牛糞ノ乾燥モノ」の文字と羊の丸煮の画〕先づ一番に頭を割つて蒙古刀の先に肉をのせて仏様に上げる。それから思ひ思ひに食ふといふ具合なんです。しかし、そんなのはお客の場合などで、普通の人間は粟を食つてゐる。それから磚茶といひまして、持ち運びに便利なように煉瓦のやうに固めたお茶をのむ。夏の間は牛や羊の乳が出るので、ガブガブのんで粟はなるべく冬へ持ち越す。貧乏人なんか滅多に羊肉なんか食つてないやうです。支那人なども肉類はめつたに食ひません。油は料理によく使ふが、肉なんかは

ほとんど食べぬ位です。／彼らが羊を殺すのはとても面白いのです。羊を先づひつくり返して臍の辺に蒙古刀を突こむ。そこから手を入れて心臓の辺の大動脈を握り潰すのです。それから皮をはいで俎板代りにする。腸なども血で洗って腸詰にする。蒙古刀一本できれいに料理してしまふのです。

林、馬の乳ものむと言ふが

尾崎、そのまゝでは飲まぬようですね。羊はなくとも馬は大抵持つてゐる。馬の乳は加工して、たとへば醗酵させて馬來酒をつくる、チーズやバタなども作る。固形カロリーを作る訳なんですね。

林、彼らの栄養状態はどんなのです

尾崎、それがよくない。六百から千八百カロリー

林、結核はないか

尾崎、蒙古人は隣に行くにも馬で走らねばならぬ程離れて住んでゐるのだし包^{バオ}だつて多くて五軒位しかない。だいたい部落から部落まで大体五里位あるでせうね。人口が大変まばらだから肺病なんかにかゝる暇がない。しかし張家口辺まで来ると、農村から都会に出た者がバタバタとたふれるのと同様やられるやうです。

林、吾々生れた時お尻にある痣、あれは蒙古斑と言ふのだが、ひよつとすると吾々は蒙古人の子孫ではないのかね、[このあたりの欄外に、「蒙古斑」の文字と「お尻に痣」のある乳児の画]

尾崎、成吉思汗が大変恐かつたと見え、今でも東洋人を見ると「モーコ、モーコ」と言ふさうですが、西洋人にも蒙古斑はあるらしいですよ。東洋人を皆蒙古人と云うふのですよ。[下線部は異筆]

園長、戸籍はどうかね。

尾崎、やはりあるらしいですね。草を追つて移動するコースが略きまつてゐるらしいので、役場に届けるらしいです。

林、喇嘛教は仏教かね、

尾崎、むろんです。あちらでは僧侶にとっても権力があるんです。一人僧侶になれば九族天にかぶると言われる位です。殺生禁断は喇嘛教の教へなんですが、しかし、羊は殺しても蚯蚓は殺さないなんて、日本人なんかも魚を獲るのが殺生にならぬのと同様なんでせうね。

林、海がなくて塩には困らぬのか

尾崎、世の中はとても調法に出来てゐるもので、あちらには岩塩が幾らでもあるんです。おまけに湖塩がとれる。信玄の甲斐国が塩に困つた時、敵側の謙信が塩を送つたといふ美談があるが、海のない蒙古には北の方にコンゴルとかイクアラルとかいふ大きな鹹水湖が多数ある。水面が蒸発するので、上に何尺といふ塩の層が出来る。これを取る。吾々はそれを湖から取るので「湖塩」といふ。南の方には「土塩」がある。おもに支那人がやつてゐるのだが、あちらの黄土といふ土は非常に粒がいい。黄土が堆積すると縦に髓が出来る。細い無数の髓なんだが黄土にはそんな性質がある。毛管現象といつてその髓を伝つて地下の鹹水が地上に出て来る。地上では日光の熱で蒸発するものだから、黄土の表面が天然の塩田代りになる。塩分がきついので作物は何も出来ぬのですが、それが所謂アルカリ地帯なのです。その塩土から塩をとる。

通信

園長、郵便、電信、電話は

尾崎、日本軍が無電機を持つて沢山入つてきたものですから、役所同志の連絡は案外よくとれてゐますね。／郵便は面白いのです。戦争中は敵国だつた訳ですが、私の隣の知つてゐる人なんか、重慶に手紙を出したところ、立派に返事がきましたね。とても面白いのですよ。

園長、学校は

尾崎、ありますね、^{バオ}包の家が十ぐらゐらんでゐます。あちらの字はとても面白いのです。=== 「あちらの字」らしき文字の筆記] 今忘れてしまひましたが、これが尾崎とか言ふのですと黒板に書く。

僕の見た蒙古の本

林、といふ絵本がこゝにあります。それをちよつと読んで見ませうね。あとで回覧したらと思ひます。

朗読の合間合間に尾崎先生の説明が入る。／朗読しながら

林、競馬には金を賭けるのかね。

尾崎、賭けないらしい。

林、駱駝は走るのかね。

尾崎、追つかけると走る。今、蒙古相撲を思ひ出しました。土俵がないのです。そして膝をつくとか、手をつくまでやるのです。ついた方の負なのです。

林、日本人はどの位。

尾崎、兵隊もよせて四万位。^{バオ}包の中で生活してゐたのは千人足らずでせうか。

林、野呂は沢山ゐますか。

尾崎、私のあつた野呂は二千頭もをつたでせうか。とても快速なから乗用車で追つかけて撃つのです。それも始めの間は負ける位です。／蒙古桜はほんの一尺ほどの草花なのです。桜と言へば桜なんですが、日本の桜にちよつと花が似てるんです。とても強い花で二、三ヶ月位水をやらなくても枯れません

林先生朗読を終つて、終戦になつてみれば蒙古などといふ国は吾々に縁の遠い国のやうに思はれますが、その国の為祈るといふことが即ち東洋永遠の平和に貢献することであり、これが平和の進駐であり、さうして大東亜共栄圏を築きたいと思ふ。／終戦になると同時に、「早く十年前のやうになればよい」など、いふ声をきくが、私は金持も貧乏人も配給品を一樣にうける戦争中の方が却つてよいと思ふ。十年前に戻ることが文化の回復ではない。それは廢頽である。けふの座談のやうに広く目を世界に注ぐことが大切であつて、十五日以来の重苦しさを心にひめることなく、再生の一步を力強く踏出したと思ふ。最後に進駐軍の印象について

進駐軍のこと〔下点線部が原典では半ペラ1枚に記されていてその面には、おおきな×

の抹消線がいくつもある]

尾崎、とりとめのない話で、林先生と対談のやうな形になつて失礼です。二十五日には米軍が四国の松山にも来ることになつてをります。京都の第六軍の分団が岡山と四国に上る。進駐軍を迎へるその準備のため衛生方面を調査のため上京したのですが、誰も経験のないことなので、特に女など相当不安だつたらしいのです。女学校を休むなど、しかし率直に言ふと、日本軍以上に軍紀は嚴重です。結論から先に言ひますと、そんなに心配したことは無いと言ふことなんです。安心してゐて差支へないと思ふ。私などあらで汽車などに乗つても、日本人が支那の婦人に席を譲るのなど未だ一度も見たことがありませんが米兵は平気で日本の婦人に席を譲ります。それほど寛大なのです。銀座などを白い服を着たのが沢山歩いてをりますが、此方の服装が汚れてゐる関係で、とてもそれが綺麗に見えますね。記念品だと言つてつまらぬ下駄を買つたり、位牌や女の帯を買つてゐます。兵隊の給料は二百円位とか聞きましたが、女郎買ひなど百円ださうです。／婦人に対する暴行事件など東京ではなかつたのですが、横浜に二件ありました。しかしそれも後で調べて見ると此方が悪かつて謝つた始末です。最初に「水を呉れ」と言つてきたのださうですが、そこの奥さんがビールなど出してサービスしたので、てつきり変な家だと勘違ひしたのです。結局、問題はよい通訳が慾しいといふことです。／進駐軍は上の者も下の者も同じ服装です。階級によつて腕の腕章が違ふだけです。彼らは少しもいばらない。立場をかへて若し私がアメリカに乗込んだのだつたら、相当いばるだらうと思ふけれど——。それに話さへすればよく理解して呉れる。出来なければ出来るようにしてくれる。彼らは驚くほど能率的です。まあ、進駐軍が来たとしても二、三日は遠慮するとしても、十日も経てば充分安心出来るのではないかと思ふ。米兵は日本の婦人に席を譲るが、日本人だつたらその逆だからね。電車の後部にぶら下つてふざけるやうな茶目気たつぷりのもある。東京や京都などでは、「米兵の方がえー」なつて言つてゐます。なさけないことです。しかし、彼らの進駐を甘く見ることは禁物です。武装解除が終つたら相当根本的改革の申入があるのではないかと思ひます。誤解のない様——。

／以上、／そして最後に総代石本氏の謝辞があつて座談会は和気藹々裡に終了。(三時半)

不明 いったい尾崎とはどういう人物なのか? (「四国総監府の尾崎衛生技師」とのかんたんな紹介があるが)、彼と大島青松園との関係は?、この座談会開催の背景やきっかけや目的は?、「蒙古」をなぜ話題としたのか、といったいくつかの疑問がわくが、この座談会記録にも、またこれが掲載された『青松』第13号にも、それに答える記述はない。

それにしても、尾崎自身が「率直に言ふと」と語ったとおり、1945年10月のこのときに、ずいぶんとあけすけに語る座談だったとみえる。療養所内でもずいぶんと「十五日以来」の外界のようすを知る機会となったことだろう。療養所内で外部の情報を得る手立てを伝える、これは稀有で興味ひかれる記録である。

その裏面 この座談会記録は、会話の内容を伝える記録として重要であるだけでなく、依然として物資が不足していたためなのであろう、反故としてその裏面が使われたかつての表面、そこに記された情報もまた、稀有でおもしろい記録となる。

たとえば、「大島青松園薬局」の名が入った「内用薬」票は、手書き手づくり『青松』に用いられた反故としてすでにお馴染みである(本来の順でゆくとページノンブル4となる原稿用紙の裏面)。

ページノンブル3の裏面の反故となった稿に同4が記され、おなじく5の裏面に6が記されていて、その4、6と記された稿と、もうひとつページノンブル7の裏面(ノンブルなし)のこれら3枚の原稿用紙には謄写版刷りで、「＝自治会係員ニ関スル質問＝」と表題が印されている。5点あるその「質問」は――

- 一、新ニドンナ係員ヲ設ケタラ良イカ
- 二、現在ノ係員中廃止シテ良イモノガアレバ何カ
- 三、手当ノ割合ニ仕事ノ楽ナモノハ何カ
- 四、仕事ノ割合ニ手当ノ少イモノハ何カ
- 五、其他係員ノ仕事等ニ付イテ改善スベキ点トソノ方法ハドンナモノデセウカ

これらの質問への応答は――

〔ページノンブル4〕〔質問1に〕印刷係／〔質問4に〕病室監督／〔質問5に〕病室監督増員スルカ／但シ手当ヲ増額スルカ

〔ページノズブル 6〕〔質問 4 に〕病室監督

〔ページノズブル 7 の裏面〕〔欄外に〕以下質問応答は全員賛同の意見に付き（ ）に横田友助の長靴希望あるのみ／〔質問 1 に〕設置必要なし／縮小主義に／〔質問 2 に〕（事業部を廃止し／作業と兼任、次後は特別委員を評議中より推出して事務を扱ふ様希望／〔質問 3 に〕治療室監督、炊事監督、ラジオ係／〔質問 4 に〕委員会用人／特定室の大掃除／〔質問 5 に〕支給品統計調査其他一般／役所の取扱及事務は自治会に引取りてせざる様消極手段を希望

こうした調査がいつころ、どのくらいの頻度でおこなわれていたのか、回答率は、回答の内容は、といくつもの点を知りたいが、それらはわからない。こうした質問がおこなわれていたこと、3例ではあれその回答が残っていること、反故扱いとなった文書は、療養所内での調査と回答の一端を伝える大切に扱うべき記録である。

1945年10月当時、大島にいた人びとのあいだで、なにが議論され、なにが考えられ、なにが記されたのか、を『青松』第13号掲載の記事や稿から知ることができる。それとともに、この第13号の誌面の裏は、同号がつくられるよりもまえの大島のようにすを伝えている。そうした層のある情報を録した手書き手づくりの冊子が、本誌第13号である。